

春^{はる}はあけぼの。

やうやう白くなりゆく山際、少しあかり
て、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏^{なつ}は夜。

月の頃はさらなり。

闇もなほ、螢のおほく飛びちがひたる。
また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち
光りて行くもをかし。
雨など降るもをかし。

あき
秋は夕暮れ。

夕日のさして山の端いと近うなりたるに、

鳥の、寝どころへ行くとして、三つ四つ、
二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。
まいて、雁などのつらねたるが、いと小
さく見ゆるは、いとをかし。

日入り果てて、風の音、虫の音など、は
た言ふべきにあらず。

ふゆ
冬はつとめて。

雪の降りたるは言ふべきにもあらず、
霜のいと白きも、またさらでもいと寒き
に、

火など急ぎおこして、炭持てわたるも、
いとつきづきし。

昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、
火桶の火も、白い灰がちになりてわろし。

げんだいごやく

(現代語訳)

春は、あけぼのの頃がよい。だんだんに白くなつていく山際が、少し明るくなり、紫がかった雲が細くたなびいているのがよい。

夏は、夜がよい。満月の時期はなおさら

やみよる

ほたる

だ。闇夜もなおよい。蛍が多く飛びかつ

ているのがよい。一方、ただひとつふたつなどと、かすかに光ながら蛍が飛んでいくのも面白い。雨など降るのも趣おもむきがある。

秋は、夕暮れの時刻がよい。夕日が差し、山の端がとても近く見えているところ、からすが寝どころへ帰ろうとして、

三羽四羽、二羽三羽などと、飛び急ぐ様子さえしみじみともものを感じさせる。ましてや雁かりなどが連なつて飛んでいるのが小さく見えている様は、とても趣深い。日が沈みきつて、風の音、虫の音など、聞こえてくるさまは、またいいようがない。

冬は、朝早い頃がよい。雪の降ったのは
いうまでもない。霜のとても白いのも、
またそうでなくても、とても寒いのに、
火を急いでつけて、炭をもつて通つてい
くのも、とても似つかわしい。昼になつ
て、寒いのがゆるくなってくる頃には、
火桶の火も、白く灰が多くなつてしまい、

よい感じかんがしない。